

# 学校祭，生徒と教師

提案権と決定権

2001.9.20

仮説実験授業研究会

北海道・丸山 秀一

札幌たの授サークル用レポート

## 定時制の学校祭

全校生徒 30 名ぐらいですから，学校祭もとてもこじんまりと行われます。学校祭の内容は，毎年生徒会役員が相談して決めます。今年は，「旗コンクール」と「クラス発表」の二本立てとなりました。

《世界の国旗》を生徒さんたちにたのしんでもらっているボクは，これは授業の成果だ」とほくそ笑むのでありました。ただボクは「旗のテーマは定時制がいい」と主張したのに，生徒会は「テーマはクラスの旗」と決めたのがちょっと不満でした。《世界の国旗》で学んだように，「思いの込められている旗」を作って欲しかったのです。

行事で熱血したくて教師になったボクは，本来は行事で生徒さんたちを扇動するのが大好きです。しかし，少人数でそれぞれが個性あふれる生徒さんたちの定時制に来てからは，全く熱血することなく，6 年間を過ごしてきました。それに今年異動した友人の跡を継いで受け持ったクラスは，

過去の様子から見て、そういった行事に全く関心のなさそうなクラスでした。去年の学校祭は「ちぎり絵製作」で、このクラスは立派なものを作りましたが、実質的に製作に参加していた生徒は香さん、ひとりだけでした。生徒さんたちは互いに仲がよいとはけっして言えず、さらにあるカップルが最近別れたばかりということもあって、クラスにはトゲトゲしい雰囲気は漂っていました。だから、「彼らを学校祭に取り組ませるだけでも大変だ」と思っていたのでした。

[ 質問 ]

いよいよ学校祭の準備が始まりました。最初は計画からです。一回目の打ち合わせで生徒さんたちの反応はどんな感じだったのでしょうか。

予想

- ア とても意欲的だった
- イ あまり意欲的ではなかった
- ウ 全然やる気がなかった

### 第一回打ち合わせ

そうして一回目の打ち合わせのときがきました。いままで担当してきたクラスでは、「みんなで話し合え」と一言言うだけで良かったのですが、このクラスにはリーダーもいなくて、それだけではどうしようもないのが明らかでした。そこでボクが一人一人の意思を確認するように話すことにしました。

「旗のテーマは、クラスが 6 人だから、それを表したものがいいと思うのだけど、どう？ 雪の結晶が 6 角形だよ。材質は・・・，大きさは・・・，デザインは・・・」

生徒さんたちは、とてもよく乗ってくれました。「先生、旗には意味があるんだよね」なんて、しっかり《世界の国旗》の学習成果も上がっています。生徒たちの反応を見ていて、「これは優勝するしかない」と思いました。というのも、昨年のちぎり絵で、このクラスはとても素晴らしい作品を作りながら、審査員の教育的配慮により 4 年生が優勝となった経緯もあるからでした。

旗については、「クラスの六人を表すシンボルとデザインを各自考えてくる」ということになりました。

「クラスの出し物」の検討は、もっと盛り上がりました。というのも、ボクが今までの定時制での学校祭にはなかった「模擬店」を選択肢のひとつとして提示したからです。ヨーヨーつり、綿飴、べっこうあめ、プラバン、かたぬき、

カキ氷など。生徒さんたちからは、さらに「焼きそば、チョコバナナ」が出されました。

予想外の盛り上がりにはボクはすっかり気をよくしましたが、ひとつ心配なこともありました。というのは、「旗が女子」「出し物が男子」となんとなく関心が分かれていたからです。

[ 質問 ]

三年生以外のクラスは、もう準備に入っていましたが、ボクは直接民主制で全員が納得してから、準備を始めるつもりでした。たいした計画なしに準備を始めて、途中でいがみ合うことにならないようにと気を遣ったのです。そして、ひとりひとりの思いを把握する意図もありました。

ボクはクラスの旗のデザインやべっこうあめ、プラバンの道具を持って行って、話し合いに臨みました。

さて、生徒さんたちの反応は？

予想

- ア とても意欲的だった
- イ あまり意欲的ではなかった
- ウ 全然やる気がなかった

- 第二回打ち合わせ

旗のデザインを考えてきたのは、ボクともうひとり、岩田君だけ。しかも、ふたりのデザインは全く無視されました。彼らは「思いが込められた旗」ではなくて「カッコいい旗」が作りたかったのです。

さらにボクが用意した、べっこうあめやプラバンは「こんなの全然ダメ、おもしろくない」とあっさりと却下されました。そしてボクがあまり推奨しない焼きそばとかチョコバナナに執着します。そしてとうとう、男子は「旗なんかどうでもいい、そんなの女子がやればいい。俺たちは模擬店の準備をしたい」と言いだし、女子と対立し始めました。いたたまれなくなったのか、中間派のエミリさんは廊下に出て隣のクラスの生徒とおしゃべりを始め、それに男子が同調する始末。その状態を見て、ボクは怒りがこみ上げてくるのでした。

[ 質問 ]

「ボク」はどうしたでしょう。あなたならどうしますか。

予想

- ア 怒鳴って説教を始めた
- イ なにもしなかった
- ウ 説得を続けた
- エ 職員室へ戻った

### 提案権と決定権

ボクは失望の中にいました。自分の思いが強かったのを思い知らされました。それでもボクは、ひとりひとりの意見を聞き続けました。そして、旗のデザインはドラゴンと決まりました。ボクは「6個の星も入れたい」とあくまで「旗の意味」にこだわりましたが、生徒たちに強く否定されて引き下がりました。

職員室へ戻っていつものように（ボクは職員室で愚痴るのが日課）「やる気のない生徒たちに怒鳴りたくなった」とこぼすと、年輩の先生に「おこっちゃだめだよ」と諭されました。

ボクは自分の思いを生徒に押しつけようとしていたのです。国旗が大好きなボクは、生徒さんたちが旗を作ると言うことだけで感激し、「素晴らしいものを作りたい」という自分の思いを押しつけたかったのです。

しかし、いつでも教師が持っているのは「提案権」だけです。決定権は、教育の主役である生徒の方にあるのです。授業書ですら、生徒たちが「つまらない」といったら、やめるのが当たり前なのです。ボクは、彼らの思いを尊重することにして、これからはアドバイスに徹することに決めました。

### 三回目の話し合い

他のクラスが準備を進める中、三年生だけはまだ話し合いを続けていました。しかし、みんなすっきりしてから作業に入りたかったのです。

旗のデザインは、「これがいい」と主張する何人かの生徒がけっして自分たちの意見を変えようとしないので、すべての意見の折衷案という「妥協の旗」となりました。こうなっては、もうデザインに意味などはありません。ただそれぞれの生徒の意見が採り入れてあるだけです。でも、それこそが実際の旗なのかも知れません。

話し合いでは、旗のデザインの細かいところまで、ひとりひとりに確認を取っていきます。「生地はこれでいい？配色は？」そして全員が納得したところで作業に入りました。

### [ 質問 ]

みんなが納得してからの作業です。作業に生徒さんは、どのように取り組んだでしょうか。

### 予想

- ア みんな意欲的に取り組んだ
- イ 男子と女子がケンカを始めた
- ウ 意欲的ではなかった

## 作業

旗製作の作業を始めてすぐに、「旗なんかやりたくない。模擬店の準備をする」と男子たちが離反。女子は女子で「男子なんかいないほうがいい」という有様。それに対応するボクは模擬店の準備では男子の機嫌を取って、旗の製作では女子の機嫌を取る「コウモリ人生」。生徒たちはやれ「

をもってこい」などと担任をこき使うばかり。そうしてボクも不機嫌になり、全体がいやーな雰囲気になっていきました。

そうしてとうとう決定的な対立が発生しました。女子と男子がケンカを始めたのです。それは男子が「旗の製作に金をかけすぎだ。担任が自腹切っているのがわからないのか。もっと考えろ」と言ったのが発端です。ここにきてついに、それまで男子に同情的と思われていたエミリさんまでが、「手伝いもしないやつが、文句を付けるな」と一喝して、返す言葉のない男子が失踪してしまったのです。

## [ 質問 ]

さてボクはどうしたでしょうか。みなさんならどうしますか。

## 予想

- ア なにもしない
- イ 話し合いの場を持つ
- ウ キビシイ指導をする

争いの元に正義あり

これも正義の対決なのです。どちらにも正義がありますから、どうしようもありません。それに対立は今始まったことでもありません。様子をうかがいながら、成り行きを見守ることにしました。

放課後になって教室に戻ってきた男子は、また女子と言いが続けられました。そこにボクが入っていくと、「出ていって!」といわれる始末。もうボクは知らんぞ!!

[ 質問 ]

次の日からの生徒さんはどうなったでしょうか。

予想

- ア 準備をやめてしまった
- イ 今まで通り意欲的ではないが取り組んだ
- ウ とても意欲的に取り組んだ

生徒のホンネ

みんなが互いに言いたいことを言い合ったのが良かったのか、次の日から男子は、それはもう積極的に模擬店の準備を始めました。職員室の教師も、そんな彼らを見るのは初めてなので、驚くばかり。なにせ担任のボクが一番驚いているからです。

彼らは、校務補さんや警備員さんまで巻き込んで準備を始めるのでありました。ボクが警備員さんにお礼を言いに行くと、「定時の生徒はかわいいから、手伝いたくなるのですよ」との優しいお言葉、うれしかったな。

準備していると生徒さんから「前の担任は学校祭にこないの？俺らが頑張ったのを見て欲しいしょ。」との声。実は、彼らは前の担任(今も?!)には迷惑のかけ通しだったのです。ボクが「遠いから、どうかなあ」というと、「そんなことない！終わってからすぐに高速でくればいいんだ。」やはり、頑張ったことを見て欲しいようです。そういえば、準備の最中に前担任からの励ましの手紙が届いたのです。生徒たちは「うちらがやっていることを知っているんだ」とうれしそうでした。「でも、何で知っているのよ？」と不思議がるから生徒はおもしろい。

さらに生徒は、これまたいつも迷惑をかけている(授業中言うことを聞かない)音楽の先生のことにも気になりました。

優「じゃあ音楽の先生はこないかな」

健「来るわけないだろう、俺が授業中に誘ったら、おま

えが くんなよ！ といったんじゃないか！」  
優「えっ，・・・そうか。先生，音楽の先生の電話番号教えて，俺，謝ってくる」

生徒はさらに「来年はさ，中学生も呼んで，定時制の良さをアピールしようよ。そうしたら，入学者も増えて，定時制が無くなることもなくなるでしょ。俺らの定時制が無くなるのは，俺は嫌だよ。」とまでいうではありませんか。入学者数減による定時制の募集停止（＝廃校）を心配しているのは職員室では僕一人だけになって孤独だったのですが，仲間は生徒の方にいたのです。ボクは胸が熱くなりました。

準備が進むに連れ，他のクラスの様子も伝わってきます。1年生は模造紙に鉛筆と墨でのモノクロの旗，2年生と4年生は布にポスターカラーで描いた旗。そして三年生は，すべて布による旗。しかも，竜の鱗にスパンコールを使ったり，ブラックライトで発光する仕掛けがあり，旗の周りにフサまでついていると言うもの。ほかの学年のものとあまりに違うのです。生徒は「先生，これじゃ四年生に勝っちゃうよ」と心配しています。みんな教育的配慮があるんだなあ。

学校祭前日には，帰りが遅いので迎えにきた生徒のかあさんまで加わっての作業。旗が完成したときに，旗製作の中心の香さんが「六つの星をいれようよ」というので，ボ

クはあわてて「誰かから反対が出たら、また大変だからやめよう」と止めました。でも、ふと思い出すと・・・。「あっ、計画のときに俺が星を入れようと言ったときに、強固に反対したのは、おまえじゃないか!!!」

そして、旗には、クラスの六人を示す六つの星が入れられました。模擬店会場の準備を終えた男子もやってきて、「星は七つだよ。先生の分も入れなくちゃ」というではありませんか。そういうのにとっても弱いボクは「いや、俺はドラゴンだから、いいの。周りの六つの星がおまえたちで、俺は中心のドラゴンだ」と言い放つのでありました。ボクは昔から、生徒さんたちに「素直じゃない」といわれています。うーん。

当日

当日の各学年の出し物は、1年がバンド演奏、2年が早食い競争、4年がクイズということで、出し物でも三年生は完全に浮いています。異常なのです。しかも、定時制の学校祭で初めての模擬店です。

「いよいよ開店」と、会場のドアの鍵を開けてビックリ。中が荒らされていたのです。賊は窓をこじ開けて侵入し、準備したものをめっちゃめっちゃにして、ラジカセを盗み、黒板には大胆にも「爆走参上」とヤンキー風の絵まで残していきました。この悲惨な現状に、男子たちは声も出ません。無くなったラジカセは全日制の教室で壊された状態で発見され、犯人は全日制の生徒らしきことは明白。ほどなく校

長までが謝りに来てくれましたが、男子たちのやり場のない怒りはどうしようもありませんでした。

「とにかく進めること」ボクの頭には、それしかありませんでした。あいつらの尻を叩き、率先してボクも準備に加わりました。そして、「みんないいかー！店開きするぞー！」「おおーっ！」全員の声がそろったときに、もうそんな不幸な事件は忘れ去られていました。

かつてない学校祭の企画に、生徒よりも職員に喜んでもらえたようです。模擬店は予想以上の成功でした。そして表彰式。旗コンクールの優勝は、もちろん三年生でした。

### エピローグ

学校祭は終わりました。しかし三年生には模擬店会場の後片づけという仕事が残っていました。他の学年の生徒がさっさと帰った後、日頃掃除もまじめにやらない奴らが、片づけているのを見るのはおかしくもありました。

健「来年はみんな仲良くやりたい」4

香「当日より準備がたのしかった。くだらないことで男子とケンカしたけど、今年の方がたのしかったー。」4

岩「今までとは違うことをやったのがよかった」4

優「準備がとてもたのしかった」5

(数字は「たのしさ度」です。)

ちょっぴり自信のついたみなさん、これからどうなるかな？

## 謝辞

今年の学校祭は、ボクが積極的に関わったために、いろいろと考えさせられることがありました。これを森永幸夫さんが聞きつけて「詳しく知りたい」と言ってくださったことが、このレポートをまとめるきっかけになりました。

「当日よりも準備がたのしい」「ケンカもしたけど準備がたのしかった」という生徒さんたちの感想は、とても興味深いです。彼らは無気力なんかでは全くないのです。

文部科学省が新しく導入した「総合学習」は、学校の現場では嫌われています。しかし、ボクはこの学校で、生徒さんたちがそっぽを向く教科学習の代わりに、総合学習をどんどん取り入れてゆく方針を持っています。文部科学省がとうとう「たのしさの優先」を打ち出したのですから、「シメタ」というわけです。ボクが考えていることを話したら、生徒さんたちは「それがいい！」ととても喜んでくれました。もちろん失敗に終わるかも知れません。これも仮説実験です。でも「提案権」を活用させてもらいますよー。



文中，生徒さんたちの名前は仮名です。

丸山 秀一

[kasetsu.maruyama@nifty.com](mailto:kasetsu.maruyama@nifty.com)